

今の守り手として、市民の誇りを次の世代に ～ つなぐ ～



京都市消防局長 名 畑 徹

京都市は、三方を山に囲まれた「京都盆地」と「山科盆地」を中心に北から南に緩やかに傾斜する市街地が広がっており、市内を流れる主要な3河川（桂川、宇治川、鴨川）が市域南部の開けた地域で合流して淀川となって大阪湾へと注いでいます。典型的な内陸型盆地という地形が夏の蒸し暑さと「底冷え」と呼ばれる冬の厳しい寒さをもたらしていますが、同時に、この寒暖差の激しい気候が鮮やかな樹木の紅葉をもたらすなど京都市の景観に彩りを添えています。

794年（延暦13年）の「平安京」遷都から1200年以上続く京都のまち、そこに暮らす人々の暮らしは常に災害と隣り合わせでした。先人たちは、ひとたび災害が起これば、身を寄せ合い、そして互いに助け合うことで、たくましく「まち」を“つないで”きましたが、その意識は江戸中期に原型が生まれた消防団や明治以降に設置された公設消防が発展するなかでも変わることなく引き継がれ、街角に置かれている“赤バケツ（消火用バケツ）”に象徴されるように、地域全体でまちを守る現在の京都の姿につながっています。

このような京都のまちに昭和23年の自治体消防制度の開始とともに発足した京都市消防局は、火災増加を受けて全国に先駆けて行った無火災都市宣言、現在の自主防災組織の土台となった自主防火町の市内全域での結成、文化財防火に関する取組など、常に市民と共に防火防災に取り組んできた一方、消防機関として、都市化の進展とともに、火災のみならず、救急・救助事故、さらには、複雑多様化する大規模災害等に対応できる人員、施設、装備の充実強化、活動技術の向上、他機関との連携強化に絶え間なく取り組んできました。

先人たちが育み伝え遺してきた価値を次の世代に継承するため、本市では、今後のまちの羅針盤となる「京都基本構想」と分野横断のアクションプランである「新京都戦略」を策定し、政策分野ごとの方針や取組等をまとめた分野別計画などと合わせて「京都基本構想」が描くまちの実現を目指しています。

消防局においても、中期的なビジョンとして5つの重点方針を掲げ、市民の生命・身体・財産はもちろん、先人から受け継いだ世界に誇る京都の文化財や町並みを火災から守り、消防団、自主防災組織、事業所等の災害対応力を高め、共に地域を守ることにまい進しております。

近年、増加・激甚化傾向にある自然災害や4年連続過去最多となった救急出動件数に加え、リチウムイオン電池など新たな要因による火災件数の増加など消防行政は新たな課題に直面しています。

この急増するリチウムイオン電池火災の対策として、家庭にある金属製の「缶」を活用した保管・充電と、周囲に燃えやすいものを置かない「環」境の整備による被害軽減を目指した新たな取組「リチウムカンカン大作戦」を展開し、これまでの取組みとも織り交ぜながら出火防止を呼び掛けています。

変わりゆく環境の中で、これまで培われてきた京都の姿を受け継ぎながら環境に合わせた変化を取り入れていく。京都の“今”を担うものとして、先人たちが“つないで”きたこのまちを次の世代に確かに“つなぐ”ことができるよう、これからも全力で取り組んでまいります。